

「3月の霜柱」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

東京の3月といえば、一応春ということになっている。実際にウメは終わって、モクレンは今にも咲きそう、ジンチョウゲの香りもしている。しかし、今朝は減法寒かった。気象庁の発表では、驚くべきことに、都心で氷点下になったという。(減法=非常に)



「3月の霜柱」 イチョウの枝を持ち上げている。

こんな朝は、霜柱を見られる可能性が高い。「霜」は空気中の水蒸気(気体)が直接昇華してできる。「霜柱」は、地表付近の土中の水分(液体)が凍って押し

出されてくる。名称は似ているが、メカニズムがまったくちがうし、姿もちがう。



「消えゆく霜柱」 下部が細いのが特徴

霜柱は、土があればどこにでもできる・・・というものではない。土の微妙な柔らかさと、含有水分量が重要で、条件は意外にも厳しい。イチョウ並木のウメの樹の植え込みに、最適の土があって、今朝も自然は勝手に芸術品を創り上げていた。

しかしこの美しい自然の造形も、実に短命である。

特に太陽の光に弱い。太陽光は半透明の霜柱を透過して、その下の黒い土を温める。従って、霜柱は下から融けてゆくことが多い。霜柱がすっかり融けて、持ち上げられた土だけ、屋根のように残ることもある。

あ、この写真を撮っていたら、附属中学の理科の先生が通って、挨拶をしてくれた。1年生もさっそく、この霜柱を観察していた。今日はいいい朝だった。

「ギンリョウソウのように先端が曲がった霜柱」

